

書 評 と 紹 介

岩田正美著

『ホームレス / 現代社会 / 福祉国家』

「生きていく場所」をめぐる』

評者：玉井 金五

近年における世界の主要国をみると、「ホームレス問題」が大きな社会的関心を集めるに至っている。国によっては独自の立法化を図ったところもある。ホームレス問題は何も今に始まったことではないが、主要国における取組みをみると明らかに以前とは異なった段階に入ってきているといつてよいだろう。いいかえれば、そうした事実の生起こそはホームレス問題に迫る視点のあり方そのものを、もう一度考え直す機会になっているとみるべきかもしれない。

翻って眼をわが国に向けてみると、東京や大阪といった大都市を中心にホームレスが激増し、それが大きな社会問題となりつつあるのは周知のとおりである。いわゆるバブル経済の崩壊後あたりから量的に目立ちはじめ、90年代の半ばを過ぎる頃には、増加の一途を辿っていた。道路や公園、高架下や河川沿いにダンボールやビニールシートで囲った仮設ハウスの光景は、現在ではすっかり都市の一部に溶け込んでしまったかのようである。

では、なぜわが国でもこのようにホームレスが激増するに至ったのか。たしかに、90年代に入ってから長引く経済不況が大きな底流となっているのは確かだが、それだけでなく他の新

たな要因も絡むことによって今日の事態が出現しているとみるべきであろう。それは、ホームレスの存在形態ひとつとってみてもその兆候は十分窺えるのであり、これまでの分析枠組みをもってしては、ホームレス問題の深層に到底立ち入ることはできないのではないだろうか。

かかる状況を反映してか、ホームレスにかかわる文献や調査報告等が急速に刊行され出してきた。ただし、それらの多くはホームレスの実態究明に力が注がれており、ホームレスとして生きることもつ意味や本質について、必ずしも十分な掘り下げがなされていない。ホームレスの存在そのものを正しく把握することの重要性はいうまでもないが、それに加えてホームレスとしての根幹にかかわる原理的な考察も不可欠であろう。

実は、こうした二つの要求に見事に応えているのが、まさに岩田正美氏の本書なのである。著者がわが国の貧困研究や生活調査の分野で優れた成果を発表されてきているのは、よく知られている。著者が有する透徹した原理的究明の力量や、鋭い現実感覚に基づくフィールドワーク面における行動力は、これまでに著者が刊行された成果のなかにちりばめられているが、同じことはホームレス研究の第一弾として出版された今回の単著にも貫徹しているのである。

本書は全体で八章構成になっており、その中身を大きく分けると、はじめの第一章と最後の第八章がホームレス問題の原理的な考察に当たる部分である。それに対して、その二つの章には含まれる第二章から第七章までの全六章は著者自身の直接インタビューを中心にしたホームレスからの聞き取りをもとに構成されているといつてよいだろう。そこで、以下ではそれぞれ

のポイントのみを摘記しながら、本書の核心に迫ってみたい。

第一章は、今日における「生きていく場所」の位置づけにかかわってくる。現代社会を取巻く社会経済的条件の激変は、人々に一層の競争を強いている。それは、いいかえれば「生きていく場所」を見出す著しい困難さにつながり、失敗すれば待ちうけているのが社会的にみて「ふさわしくない生活」なのである。今日の社会的風潮からすれば、自己責任の結果そのような事態に陥ってしまったということになる。こうした脈絡からすれば、ホームレスはそうしたプロセスにおける「敗者」としての到達点となる。

著者はこうした現代社会の変貌を注視しつつも、他方では戦後の福祉国家のなかで一旦対処されるようになった貧困が内に収まりきらずに、外へ出てきてしまったのだという見方をも提示する。つまり、寮、施設、病院といった一定の場所においてギリギリの生活を強いられていた者が、この期に及んでそうしたところから排出されるに至ったというわけである。それは、これまで十分見えなかったものが、可視的になったことを意味する。

著者によると、以上に述べた二つの事柄はむしろ大きく重なり合うとみてよいものである。90年代における厳しい不況に加えて、産業構造の転換、情報化の進展、家族の変容等の激しい動きは、これまで維持されてきたシステムに限界を突きつけただけでなく、新たな「勝者」と「敗者」をも生み出すことになってしまった。こうして、ホームレス激増の背景には、かかる非常に大きな社会変動や経済格差の拡大、さらには、旧来のシステムの行き詰まりといった事情があったことに注意を喚起している。

著者はいう。「こうして現代は、福祉国家の中に隠蔽されていた『異質性』を可視化し、あ

るいは新しい『敗者』をそれ自身が創り出すことによって、この『外部化』された『かれらの貧困』と今、直接向き合わざるをえなくなっているのである」。現代のホームレス問題の核心のひとつは、ここにある。その意味で、現象面のなかに潜む本質をしっかりと捉えておかなければならないのである。

本書は、以上に述べた基本的視点をまず開示することによって、第二章以下のホームレスの存在そのものの解明へと入っていく。第二章から七章までの克明なレポートは、ホームレスについて「場所と移動」、「生活必需品とその調達・健康状態・仕事」、「路上でのつきあい・トラブルと危険・女性たち」等、というように、生活全体にかかわる領域に立ち入り、多様化するホームレスの実像を見事に浮彫りにしている。

ともすれば、陰の部分やマイナスのイメージで描き出されがちなテーマであるが、著者は本書の随所でホームレス生活の一端を次のように生々しく紹介している。「ダンボールハウス街が形成されていた頃の新宿や、河川敷、公園などの仮小屋では、居間と寝室が分かれている、ということさえあった」、「単身男性のみを対象とした臨時施設に男装の女性が混じっていたこともあった」等は、何ともいえぬエピソードである。

他方、「...こわいのは『仲間』であり、『一般の人々』ではない。なぜか、彼らは『一般の人々』からの危険を語ろうとせず、それとのトラブルを極力回避しているようにみえる」、「...ドヤや寮があまりにひどいところで、それよりましなところとして路上があった」等というような箇所に出会うと、ホームレス問題を一律に論じきれない奥の深さといったものを教えられる。

とりわけ、第七章「考察 - 抵抗と同調」は本

書におけるフィールドワークのまとめ部分になるが、ここにおいてホームレスが一般社会に対して抵抗するというよりも、むしろ同調の方が強いのではないかといった指摘がなされる一方で、ホームレスの社会集団化を制約する内閉的傾向への言及がある。これらは、ホームレス問題の根底に潜む本質的部分を実に鋭利に言い当てているといってよいだろう。まさに、本書の独自性のひとつがここにある。

さて、以上の実態的な考察を踏まえて、最後の第八章「『ホームレス』と福祉国家」での総括となる。著者によれば、戦後の福祉国家の特質としては、その予防的性格、正規労働者を対象にした制度化、国籍や住民登録という要件等があり、それは「われわれの社会」づくりの基盤となったが、今日のホームレス問題の出現は、もはやそうした旧来のシステムが限界に達した証しである、ということになる。第一章でふれたように現代的な社会変動や経済格差の激しさが、このシステムにさらなる揺さぶりをかけているのである。

だとすれば、ホームレス問題をいかなる方向で打開していくべきなのか。著者は、ひとつの結論として「労働者自立モデル」でも「福祉自立モデル」でもない、「半就労・半福祉」という新たな類型を提示している。そのために必要なことは、「『われわれの社会』の内部の既存の装置の斬新的な変更の検討・実践であるように思われる」と述べて、旧来のフレームワークからの脱皮を強く求めている。それは、われわれの社会の価値体系の根本的な再考にもつながるだろう。

以上、本書全八章のポイントのみを紹介する形で、著者から発せられるメッセージとは何かを追究してきた。結論からいうと、原理にふれる部分と実態から解明される部分が実にうまくミックスしていて、この種の文献としては非常

に説得力があるものに仕上がっている。まさに、著者の造詣の深さを示すものであろう。それを承知で、敢えてコメントすれば、以下の二点になる。

ひとつは、福祉国家とホームレスの関連性である。著者は手法として福祉国家、いいかえれば国家福祉のレベルで問題を立て、内部に収めきれなくなった部分が外へ出てきてしまったと述べている。つまり、フォーマルな体制の行き詰まりを強調されるが、現実にはフォーマルのなかに取込まれた部分もあれば、依然インフォーマルな部分として残ってきた面もある。本書では、どちらかといえば前者の視点がやや前面に押し出されているように思われてならない。福祉国家とインフォーマルな部分とのかかわりについては、さらに立ち入った検討がなされてもよいのではないか。

もうひとつは、地域とホームレスのかかわりについてである。本書は主に東京を中心にした成果であり、むしろ日本を代表する大都会のホームレス事情としては実に興味深い事例に満ちあふれている。しかし、著者もよく知るように、ホームレス問題のスケールからすれば、いうまでもなく大阪が代表的ケースである。大阪の事例が東京と多々重なり合うところもあるが、やはり高齢日雇労働者とホームレスの関連性は大阪で際立っている。そして、この高齢日雇労働者にこそ、著者のいう「半就労・半福祉」の主張が最もよく当てはまる論理ではないだろうか。本書における政策提言は、地域性、年齢階層性、職業経験性等の要素を十分視野に収めることによって、より効力を発揮するように思われる。

(岩田正美著『ホームレス／現代社会／福祉国家 「生きていく場所」をめぐって』明石書店、2000年3月、336頁、3,500円+税)

(たまい・きんご 大阪市立大学経済学部教授)